

「ドイツ語方言の『威信』と『負の烙印』 – その社会言語学的調査について」

Die soziolinguistischen Untersuchungen über Prestige und Stigma der deutschen Dialekte.

唐 沢 徹

Summary

Wir wissen, daß die jeweiligen regionalen Sprachen in Deutschland unterschiedlich bewertet werden. An Hand einiger soziolinguistischen Untersuchungen, die in Deutschland vorgenommen wurden, werden hier stereotype Vorstellungen bezüglich der Dialektlandschaften und ferner die Funktion und Motivation des Gebrauchs von Dialekt und Hochsprache erörtert. Es wurden gezeigt, daß Stereotype gegenüber einzelnen Dialekten und ihren Sprechern nach wie vor bestehen. Zum Bestehen solcher Stereotypen haben gesellschaftlich-kulturellen Faktoren viel beigetragen. Die Gegenstände der Untersuchung sind deshalb 'social connotations' der Sprache. Die sprachliche Bewertungen sind daher als Folge dieser gesellschaftlichen Inhalte zu sehen.

Key words: Dialekt, Prestige, Stigma, Stereotyp, Hochdeutsch.

I. 「我々は皆、地域言語や方言の特徴に対して情緒的に評価する関係を持つ。これはドイツ語の標準語を話す人についても同じである。我々は、その方言による影響を好んだり、滑稽に感じたりする。時にはそれは我々には馴染みのないものであったり、時には不快なものに思えてくる。この日常的な評価、論議から数多くのジョークやからかいの話が生まれ、人々はしばしば言葉の評価がその話し手の評価に結びつくこと、その人が公の立場にある時には特にそうなることを感じている。」とH. ステージャーが書く時¹⁾、ドイツ語の方言生活の活発さ、豊かさが語られると同時に、方言に対する情緒的な社会的評価とそれに伴う社会生活での一定の制約、特に公的生活におけるその存在が指摘されるのである。ドイツ語の標準語は完全には実現されず、常に方言の刻印を帯びると言われる。この方言の刻印、いろ合いはほんのわずかなものであっても聞き取られ、その話し手の属する地域、社会集団に対する一定のステレオタイプの評価を引き起こす。方言に対する情緒的反応、評価は、社会の中に蓄積されたステレオタイプの潜在力に根ざしたものである。また、一つの社会の中ですべての地域言語、方言が平等であり、等価であるというのは観念にすぎず、現実には事実的に優勢な言語の体系が存在する。人々が社会的必要から（しばしば社会的上昇のために）優勢な言語を選択するのは当然なことである。この選択が実際には不可能であるという場合には、その人々にはしばしば社会的に不利な結果がもたらされる。ドイツでのドイツ語教育の中で方言が、たとえば社会言語学導入の初期には、もっぱらその限定性においてとらえられ、Soziolektとして排除、補正の対象にされたとしても、それは社会の中でのこの現実がドイツ語教師を動かしたものであった。しかしながら方言を単に階層論的な「下層語」に閉じ込めることへの反省は、方言の機能、その話し手に対する社会の評価、各地方毎の方言評価の違い等についての新しい調査の必要性を確認させた。U. アモンは1972年のシュワーベンでのみずからの調査の後、州の教育委員会に対し改めて「方言による諸問題」の詳しい調査を実施するよう求めた。しかしながらドイツにおける社会言語学的調査はあまり進まなかった。1983年にアモンは方言の社会的評価の経験的調査の不足を指摘し、またその他にも、K. ライン、V. ライトマイヤー、J. マッハ、M. フント等も同様の指摘をした。マッハは1981年の応用言語学会で方言使用の実態調査について新しい視点を提唱した²⁾。つまり方言が地方毎に異なった現象をする背景に、地方毎の方言に対する評価の違いがあり、この実態が明らかにされねばならない、このためには伝統的な「客観的、言語的事実」のほかに、「主観的データ」の研究が必要であるとしたのである。つまり、話し手のあいだで方言がどのような価値を持つか、どのように評価されるのか、方言を話す人がどのように受け入れられるのか、地方毎の違いがそこにあるのか否か、等の調査である。彼は方言に対する（自己による）オート・ステレオタイプと、（他者による）ヘテロ・ステレオタイプの問題のやっかいさを指摘する。方言の「主観的研究」とは、地方毎の方言に対する地域の意識に根ざした評価、心理的態度の尊重の重要性を認識するものなのである。以下には、この「主観的データ」を調査した社会言語学的研究の例をバイエルンにおけるK. ラ

インの報告と、M. フントによる「方言の色合いをもつ標準語」についての報告を中心に現代のドイツ語方言をめぐる課題を見る一方、過去における方言間の「威信」の争いを、J. Ch. ゴットシュートに対するC. F. アイヒンガーの主張をもとに整理し、ドイツ語の方言と標準語の関わりについて考察する。

II. 比較的狭い地域での、純粹の方言から標準語までの言語変種間の垂直に見られた機能の相違とそれらの言語変種の選択の動機、そしてそれに伴う心理的態度については、ミュンヘン北東約30kmのエルディング（現在ミュンヘンの新空港があり、都心まで電車で40分程度の位置関係にある）のヴァルペルツキルヘン地区での調査が詳しい事情を明らかにしている。この調査はミュンヘン大学のH. クーンとK. ラインの提唱によって承認されたバイエルンにおける言語と方言事情の実用言語学および社会言語学的調査のパイロット・スタディーとして、1974年にK. ラインとM. マイヤーによって行われたものである³⁾。ヴァルペルツキルヘンは、ミュンヘンの広い方言圏の中にあり、若者たちにはミュンヘンの都市なまりの特徴が見られる。年配の人々は古くからの方言を話す。調査は現地でのテープ収録、観察と、方言に対する態度、使用動機等についての情報を得るためのアンケートによって行われた。アンケートに協力したのは1172人の住民のうち18歳以上の7%にあたる49人である。住民のうち職業を持つ505人のなかで、農業が219人、地元で働く人175人、残りはミュンヘンへの通勤者である。この比較的狭いコミュニケーション範囲での状況毎の言語選択について要点を示すが、調査の仮説として、1) 方言か標準語かの選択は、話す状況の公共性による。公的もしくは半ば公的な場では方言は用いられず、逆に私的な場で標準語を用いることは否定的にとらえられる。方言は私的な範囲では連帯の形成と維持の働きを持つ。2) 選択は、話す状況の形式的性格に依存し、強く形式的な状況では方言は用いられない。3) 選択は、話し手の役割についての自己理解に左右される。話し手が公的生活の一地位の役割の持ち主になると方言は用いない。4) 方言の社会的受容度と威信は高い。なぜなら方言の使用は下層階級に限られないため。5) コミュニケーション範囲の狭い、手を用いる職業の人は方言のみを用いる。そのためにコミュニケーション範囲の広い、手による職業でない人と比べて標準語を学習しない人の割合は高い。後者では言葉の機能が決定的に重要であるためである。以上のような5点がたてられ、これが検証された。以下に調査の中に現れた、状況毎の言語選択の実態について要点を示す。

状況(1)「住民集会」：市長が住民を招待する形のこの集会では、市長、市議員、神父が長い演説を行ったが、すべて「きわめて標準語に近い日常語(Umgangssprache)」が用いられた。彼らはすべて方言を話すことの出来る人たちである。彼らは公的地位の持ち主として話す時には、このような高い水準の言語形式を用いる。「状況の公開性」は地元の新聞の記者が参加していることにより高まり、討論に参加する住民もより高い水準の言葉を用いるきっかけとなった。

ただし議員が「一市民」として話した時には、すでに方言の水準の言葉が用いられた。

状況(2)「市議会」：標準語が用いられる。市会議員は地域の形式的代表者としての役割の圧力のもとにある。ここでは、家族や村社会といった第1次的な集団とは異なった、いわば第2次的な小集団への帰属が意識され、議員はそれぞれの集団への帰属性によって方言と標準語の2つのコードを使い分けていることが明らかであるが、また同時にそれが可能であることも求められている。また地元の政治的催しとしての、キリスト教社会同盟(CSU)やドイツ社会民主党(SPD)といった政党の日曜の朝の集会での討論も方言の使用を許容しないのである。

状況(3)「教会」：すべての典礼で、原則的に標準語が用いられる。ここでは儀式の形式的性格や、伝統的に宗教的事柄には方言は似つかわしくないとする観念が基本にある。これに対して教区の評議会では方言が用いられる。ここでの話し合いの状況は、非公式、非形式的であり、“Du”の使用が通常である。神父自身も方言を用いる。神父には、聖職者としての役割と地区の世俗的代表者としての役割、つまり教会の枠内での言葉とその外での言葉の意識的区別が人々によって期待されていることも、アンケート調査によって判明する。

状況(4)「学校」：基礎学校の1年から4年、基幹学校の7年から9年までの各学年の教師一人ずつのアンケートによると、授業では1年生の教師を除き標準語を用いる。授業外では3人の教師が標準語であるが、うち2人は方言を話すことができない。授業外では生徒たちはほとんど日常語で教師と話をする。教師たちは全員、生徒に対して標準語を指導している。授業中に生徒が方言を用いた時には、多少とも罰があたえられる。教師たちによれば、授業中の標準語の練習、コード化にもかかわらず、期待される程には標準語の力は伸びない。両親たちは標準語の必要性を認めている。両親の39%は、子供の標準語の学習のためには親も協力しなければならないと答えているが、約80%の親は子供と方言で話をしている。ここには親の側の意識と実際の行動の矛盾があらわれている。

状況(5)「クラブと青少年グループ」：クラブの定期的な集まりではもっぱら方言が用いられる。この「総会」には役員たちの出席があり、公的、もしくは半ば公的な性格があるが、それでも方言が用いられる。ここでは方言は、強度に「集団の言語」の性格を持つ。このことは、消防クラブやカトリックの「青少年の夕べ」においても同様である。

状況(6)「日常のコミュニケーション」：家庭ではほとんど方言が用いられる。例外は夫婦の一方がバイエルンの出身でない場合、もしくはアンケートに答えた人自身がよそから移ってきた場合(5例)であった。また比較的地位の高い2人の公務員と、2人の自営業者の家庭では高い水準の日常語が使われていた。これは、彼らの社会的地位の実際もしくは目標の象徴として、その階層に対応した異なりであり、例外である。観察調査では、村の中での、友人、知人、隣人たちとの交際にはもっぱら方言が用いられ、またアンケートによっても、村の中の私的なコミュニケーションには方言が適切と考えられている。家庭で日常語を話す人も、外(村の中)では一部

方言を用いる。方言は、ここでは共同社会を作る媒体であり、連帯の意識をうみだすものである。このため、村の中で意識的に方言を用いない人がいれば、この人は「見栄っ張り」もしくは「ほらふき」とみなされる。村の役場、商店でももっぱら方言が用いられる。方言を意識的に用いないというのではなく、方言によるコンタクトの出来ない人が、結果的にアウトサイダーになってしまうということも実態である。

状況(6) 職業生活：職場での言葉についてのアンケートによると、一般に地元の農業関係の職場そしてその他の職場でも方言が用いられる。またこのことが実際に観察されている。ミュンヘンへ通勤する人は、そこの職場で日常語を用い、また教師は標準語を用いると答えている。上司との会話においては、全員が上司の言葉に合わせると回答している。その場合に実際に用いられるのは、標準語、日常語、方言の比率が2:10:6である。方言を用いることが仕事の上で有利となるか、不利となるかとの問いに対しては、有利になると答えた人は存在せず、0%であった。不利になると答えたのが35%、関係がないと答えたのが65%であった。しかしながら別の問い、つまり、新しく職を求めて面接を受ける際にどのような言葉を用いるべきかとの問いに対しては、標準語41%、日常語45%、方言14%との結果が出ている。ここにも矛盾が見られる。65%の人々が方言は仕事の上での成功に関係ないとしながら、面接での方言が後退するのは、応募者の第一印象が職業上の成功にとって重要であることを考慮し、自らの方言についての外部の評価を気にしていることを反映したものと思われる。関連して、人々の意識の中でどのような職業に標準語が必要と思われるかを調査したアンケートによれば、教師(49人)、医師(48人)、神父(47人)、女子店員(44人)、保母(43人)、販売員(43人)、銀行員(42人)、診療助手(41人)、警官(38人)、事務員(37人)、列車車掌(28人)、床屋(20人)、専門工(18人)、飲食店主(18人)、郵便配達人(12人)、農業(11人)、大工(6人)という数字があがっている。ここには、職業と標準語の「威信」(prestige)についても同時に問われているように思われる。結果として、コミュニケーション範囲が広く、手による仕事でない職業には標準語が求められている。また実際に、農民、地元の自営業者そして主婦のようにコミュニケーション範囲が狭く、手による仕事をする人々はもっぱら方言を話すことが観察される。主婦は公的な立場ではほとんど発言しない。この調査の中で、農業に従事する男女は、色々な局面での言語選択に関するアンケートで、ほとんどの場合に方言をあげたことによって特別な地位を占めている。彼等とその他に、例えば公的な集会でも方言を使用するとした人々は、実際にはそのような集会に現れない。そのような場では方言を話す人は全くの少数派である。ここでは、社会言語学的に常に論議される「民主主義の障壁としての方言」、つまり標準語で適切に表現することに困難をきたす人は、公的な場での討論に加わることが出来にくく、参加を望むことも少ない、また参加も許されにくいという問題が考えられる。このような人々は実際にまた「方言を話せるのに標準語を使う人をどう思うか?」というアンケートにおいて、そのような標準語を話す人々に対する

不信感をあきらかにしている。調査者のコメントによれば、このような人たちは、アンケートの答えの選択肢のひとつである「方言を話すことを恥ずかしく思うから人々が標準語を使う」というような可能性を全然考えない。そのために標準語を話す人は「見栄っ張り」あるいは「ほらふき」に思えるのである。そしてまた自らがそのように思われたくないために、彼らは公的な場でもむしろ方言を用いるのである。

この調査は、仮説の1)「状況の公共性」と仮説2)「状況の形式性」における標準語の選択と方言使用の後退を確認している。また仮説3)の言葉の選択が話し手の役割についての「自己理解にかかる」という点も確認している。仮説4)の「方言の社会的受容度と威信の高さ」についても、方言それ自体は下層の人々や農業者のみに限られず、中流と見なされる、割に高い地位の人々も、家族、友人、知人といったうちとけた集まりの場では方言を用い、またそれを正当と感じていることから確認される。仮説5)の「コミュニケーション範囲および手による職業か否か」による言語選択も確認されている。調査は、社会的階層が高くなるにつれて方言が日常語に代われ、さらに日常語が標準語に代わられる実態を明らかにした。よく知られているように南ドイツでの方言の使用度と威信の意味での地位は特に北ドイツに比べて高い。またそこから南ドイツでは日常語は北ドイツに比べより標準語に近い地位にある。この調査は一般的な南ドイツの、このバイエルンの事情を反映して、ここでは方言を話すこと自体は決してそのまま社会的差別の指標ではないことを確認する一方、同時にここでも標準語か少なくとも日常語が普通であるかあるいはそれが求められる状況が存在することも明らかにしている。そのような状況の中で方言を用いるのは、他に選択のない人々であることは明らかである。その人々はその職業や地位のゆえに標準語を学ばなかったのである。このことはデモクラシーの社会の中ではひとつの「障壁」である。社会的上昇のための手段を選択できるか否かにおいて、階層、地域差が重要な要素となることが確認される。

Ⅲ. 社会言語学的関心の中で、学校や教育の領域での問題は比較的早くから取り上げられてきた。これに対し、職業やその他の社会領域での方言の問題の調査はあまり行われなかった。M. フントは「ドイツ語方言のひとつひとつについて評価の差が実際に存在するのか否か、またその場合政治家の話し方の中の方言的色彩合いが、公共の場でのその人の威信にどのように影響するか？」について調査した⁴⁾。この1992年の調査では、ハンブルク、プファルツ、シュワーベン、バイエルンのそれぞれの方言の色合いが少し入った標準語が、それぞれの地方に住んでいない人々によって評価された。先に示したように、ドイツ語の標準語はそれが話される時には完全には実現されない、といわれる。「純粋な標準語が存在するわけではない。せいぜいニュースのアナウンサーや俳優の標準語のみで、それ以外は理論の産物にすぎない。」とフントもいう。そのため、話されるところの標準語とは日常生活の中での標準語であり、常にその地方の響きを若干

含む。つまり日常的な標準語はその話し手の出身地方を知らせるのである。そのような標準語の中の方言の響きによって、いわゆるプレステイジとシュティグマ（「威信」と「負の烙印」）が実際に付与されるのか否かについて、社会科学的方法で調査することがフントの計画であった。方言が上の4つの地方となったことについては、1）出来る限り少ない数の方言でもって、出きる限り広くドイツの言語地図をカバーする。2）公的生活（コマーシャル、テレビその他のメディア）においても、政治においても拡がっている方言を使用し、全く知られていない方言とよく知られた方言とを比較するというようなことを避ける。3）方言の強い南ドイツの方言のみが問われることを避け、少なくとも一つの北ドイツ方言の色合いのサンプルも取り入れて南北のバランスを考える。4）中部ドイツの方言として、中部ドイツ語に属するプファルツ方言を採用する。この方言は比較的知られたものであるにもかかわらず、これまでに方言評価調査の対象とされていなかった。以上の諸点が基準となった。対象とされた4つの方言の色合いが標準語の中で同程度であることを確認するために、K. ヤーコブによる第1次から第3次までの方言特徴の理論が用いられた。その第3次特徴は標準語の話し言葉に表れるものである。それぞれの方言についていえば、シュワーベン方言で子音の前のsが〔ʃ〕となること。aの音が鈍く、鼻音化すること。バイエルン方言での舌先のr、また暗音のa。ハンブルク方言でのgのch化。r + 子音でのrの母音化。さらに明音のa。プファルツ方言での破裂音節の前での母音の短縮。p, t, kといった子音の弱音化。chが〔ʃ〕となること。強勢のない音節でのrの消滅。そして最も目立つものとして語末音節でのenのeへの短縮等が例としてあげられる。これらの特徴は調査用に録音されたサンプルの確認作業の中でカタログ化され、チェックされた。調査はフライブルク大学で行われ、対象とされる方言の色合いをもった標準語の話し手が一定の手順を経て選ばれ（すべて女性となった）、約2分間の中立的内容のテキストを読み、これが録音された。それぞれの標準語を聞いて評価する側として、言語学のプロ・ゼミナールの学生の中から地域を考慮して、北ドイツと南ドイツそれぞれの出身者、そして男女の別にそれぞれ30人以上の4グループがつけられた。重要なのは、調査対象とされた上の4方言地方に住んだことがないという条件である。これは方言に対する立場の影響を避けるため、そしてヘテロ・ステレオタイプを調べるという目的のためである。さらに社会的地位の影響を一定に保つために、評価グループは中間層志向、もしくは中間層において社会化したということが考慮された。

調査の仮説は、これまでにドイツで行われた言語変種についてのいくつかの評価調査を手がかりに以下のようなものとなった。1）ハンブルク、プファルツ、シュワーベン、バイエルンそれぞれの方言の間では、それらがその地方以外の人によって評価される時には評価の差が生じる。その方言の言語規範が標準語に近ければ近いほど、その方言がより高く評価される。2）方言の南北の傾斜は方言を話す人についての評価にも反映する。北ドイツの人は南ドイツの人よりも方言に対する寛容度が少ない。3）男性と女性とで評価に差が生じる。以上である。調査は2段階に

分けて行われ、第1段階では調査の目的を知らせずに、音声サンプルについての印象評価を意味微分法の分類に従って記入させた。第2段階では調査の目的を明らかにし、第1段階で自ら記入したものに関して、今度は意識的な水準で「方言のサンプルの典型度」、「好感度とその理由づけ」、「政治家の方言の許容度」について質問した。意味微分法による「評価」、「活動性」、「力量性」のそれぞれ対立する項目、たとえば「友好的」と「非友好的」、「活動性」と「受動性」、「重い」と「軽い」のような合計12の対立項目については、肯定的から否定的までの7段階が選択できるようになっている。この印象調査の結果において、どの評価グループからも否定的な数値で評価されたのはプファルツ方言であった。項目として、「非友好的」、「醜悪」、「悪い」、「受動的」、「遅い」、「退屈」、「弱い」、「表面的」等の否定的な印象が共通にあげられた。それぞれの方言への評価は異なっている。極端に肯定的というものは無いが、しかしハンブルク方言がどの項目でも肯定的な値を得ていることは見逃し得ない。少し詳しく見ると、「評価」において、ハンブルクとバイエルンが共に第1位、次いでシュワーベン、プファルツの順。「活動性」においては、ハンブルク、シュワーベン、バイエルン、プファルツの順。「力量性」においては、シュワーベン、僅差でハンブルク、バイエルンとプファルツ（共に末尾）の順であった。第2段階の質問は、1)「この4つの音声は、これまでこの方言についてあなたが抱いていたイメージと合致しますか?」、2)「好感度に従って4つの方言を並べてください」、3)「あなたが並べた順について理由をつけてください」（ここでは左の欄にそれぞれの方言の主観的に感じられた「性質」、「一般特徴」を、右欄にはその性質の具体的証拠を記入するようになっている)、4)「少し方言の訛りのある政治家は、その話し方を標準語に近づけるためにどの程度努力する必要があるとあなたは考えますか?」であった。第1の「方言の典型度」についての質問では、4グループともにシュワーベン方言を非常に典型的とし、バイエルン、プファルツを典型的、ハンブルクを非方言的とした。第2の「好感度」ではプファルツ方言の最下位が目立ち、ハンブルク、バイエルンは共に1位で意味微分法の結果と対応している。この2つの質問に対する自らの評価の理由づけ(第3の質問)においては多数の様々なコメントがあげられている。評価の理由として指摘されたのは、バイエルン方言の舌先のr、シュワーベン方言、プファルツ方言の子音の前のs、プファルツ方言での語末音節の短縮等であり、共通に認識されている。これらの特徴が必ずしも一定の肯定もしくは否定の評価に直結するわけではない。つまり、「バイエルン風なので私には否定的な印象。一番ひどいのはバイエルン・フランケン方言のr、震える。」というコメントがある一方で、「きれい、滑らか、震えるrは好ましい。」という肯定的評価のコメントも出る。語末音節enの短縮(プファルツ方言)は、しかしながら一致して否定的なコメントを集めた。そこでは、「不格好」、「醜悪」、「粗野」、「もぐもぐ言う」、「だらしない」等の形容がなされたり、「語末が呑み込まれている」といったコメントがついた。対象となったすべての方言に対して無数のコメントが出されていて、それらはそれぞれの方言に対するステ

レオタイプの全目録といった様子である。それぞれの方言について頻度の多いものを例示すれば、シュワーベン方言に対しては、「さえない」、「古くさい」、「けちくさい」、「不明瞭」等。プファルツ方言に対しては、「ひどい方言」、「あまりにもぞんざい」、「間延びしている」、「野暮ったい」等。バイエルン方言に対しては、「心地よい」、「間延びしている」、「おおげさ」、「愛想がよい」、「すこし官能的」等のコメント。またハンブルク方言に対しては、「ウィットに富み、才気がある」、「大都市風」、「すばしこい」、「明瞭」等である。第4の「政治家の方言なまりの許容度」についての質問では、全グループがハンブルク方言に対する寛大さを示し、プファルツ方言に対しては「公的生活の言葉としては受け入れられない」という評価をくだした。バイエルンとシュワーベンはここでもその中間に位置づけられた。

調査をまとめてみれば、仮説1)については、その言葉の規範が標準語に近ければ近いほど肯定的に評価されることが実証された。ハンブルク方言がこの条件をもっとも良く満たす。ハンブルク方言については方言地方の選択の際にすでに、この方言が方言の特徴を持つものとして受け取られるのか、むしろ方言訛りのない標準語として聞かれてしまう可能性があることが問題とされた。しかしながらこの言葉が北ドイツ方言の一つとして若干の第3次的方言特徴を持つゆえに、調査対象の比較可能性に好都合として取り上げられたのである。実際に多くの人々がこの、テレビニュース「Tagesschau」の言葉の中の方言的特徴を認識せず、標準語として受け取っている可能性が考えられる。問題は、他の方言と同じようにこの方言にも存在する方言特徴が、なぜ聞き取られなかったのかであるが、結果的には、一定の方言の形式が受け入れられてしまう、もしくは、もはや方言とは見なされないことを確認しなければならない。またこの仮説の中には部分仮説として、「標準語の中の方言の色合いはほんの僅かなものであれ評価の差をうみだす」ことがたてられていたが、このことも確認された。仮説2)の「北ドイツの人は南ドイツの人よりも方言に対する寛容度が少ない」という点は検証されなかった。これは第2段階での質問に対する意識的な回答においても同じであった。調査をしたフントはこの点に驚きを感じている。いずれにせよ北ドイツ・グループと南ドイツ・グループは、第1段階での各方言に対する意味微分法による評価で同じ結果を示したのである。このことについて、フントは4つの可能性をあげている。1)方言評価の「南北傾斜」は存在するが、この調査の仕方では把握出来なかった。2)用いられた言葉のサンプルが適切でなかった。3)調査の仕方は方言に対する態度を調べるのに適していたが、サンプルが示したコミュニケーション領域が方言評価の「南北傾斜」を再現することができなかった。4)方言評価の「南北傾斜」が存在しない。フントはそこから放言使用における「南北傾斜」と方言についての評価を別物と考える。第2段階のコメントを見れば、それぞれの方言に対してのステレオタイプの潜在性が確認される。そこで、ある方言へのステレオタイプの成立と定着は、方言使用や、あるいは人がその方言とどれだけ接したかにかかわりがなく、それとは別にテレビ、新聞、雑誌、映画、広告等を通じて広い空間的広がりをもって存在するの

ではないかと彼は推測する。仮説3)の男性と女性における評価の差も検証されなかった。この点は、以前に行われた調査、たとえば1982年のW. シュタイニッヒの調査結果をもとに仮説化されたものであるが、この調査で対象とされた4方言については、男女によって異なるステレオタイプを生み出す要素は確認されなかった。調査のもう一方の目的である「政治家の方言の許容度、その威信への影響」については明確な結果が出された。つまり、プファルツ方言の色合いのある標準語を話す政治家は、ただその言葉にのみ起因する制裁に即座に出会う、ということである。ハンブルク訛りのある政治家は、自らの言葉の「標準語」としての「威信」を知っていて、言葉で困ることはない。シュワーベン、バイエルンの色合いのある「標準語」は、「標準語」からあまり遠くなく受け取られ、中間的な扱いを受ける。調査は、それぞれの方言とその話し手に対するステレオタイプの観念が以前同様に成立していること、これは現代の広域におよぶ社会的なそしてコミュニケーション上の均一化のプロセスにもかかわらず消滅していないことを明らかにした。言語変種が一定の人格的イメージを媒介するのに決定的に関与すること、このことは社会集団語 (Soziolekt) として扱われない今回の4方言のような言語形式にもあてはまるのであり、方言とその話し手の「威信」または「負の烙印」についていえば、それはその言葉からひきだされたステレオタイプに決定的に従うということである。

IV. ドイツ語の各方言に対して付与される「威信」と「負の烙印」についてさらに歴史のおよび地域的に見てみたい。歴史的にはおよそ230年前のバイエルン北部のオーバー・プファルツ方言と標準語との関わりについてのC. F. アイヒンガーによる議論が参考になる。オーバー・プファルツは勿論ライン・プファルツから遠く離れ、西中部ドイツ語に属する(ライン)プファルツ方言と異なって北上部ドイツ語に属し、さらに細かくは北部バイエルン方言のひとつである。1760年、ズルツバッハの学校の校長であり、アルトドルフのドイツ語協会の会員であったアイヒンガーは『上部ドイツ語方言から語源、発音、正書法を解明したドイツ語語彙について』という論文の中でつぎのように書いた。「我々上部ドイツ人がこれまでとは違った調子で語る時が来た。なぜならば、我々が我々自身を認めることに注意を払うことが少なければ、それだけますますよその人たちは我々を尊敬することが少なくなるからである。我々は我々の方言に対して不信を抱かせてしまった。それどころか人々は我々の方言を馬鹿にしきっているのだ。我々はドイツ語についての協議に参加し、決定に加わることを求めたが、我々の言うことは認められなかった。〔・・・〕 私は言う、我々がもっと口を大きく開け、思い切った要求をすることによって、我々の威信を高める時が来た。我々はもはや参加する権利で満足するものではない。我々は、我々に決定権が与えられるべきであると主張する。」⁵⁾ アイヒンガーのこの主張は、オーバー・プファルツの言葉と人々に対する見下しとまたドイツ語標準語形成の議論における無力な立場についての長年の怒りを露にしているように見える。この怒りは特に当時の政治と文化に大きな影響力を

もっていたマイセン・ザクセンに向けられたものであった。マイセン（オーバー・ザクセン）の言葉は16世紀から18世紀にかけて、中部ドイツとまた特に北ドイツ圏で模範として扱われていた。アイヒンガーの主張の背景には、しかしより具体的に、すでに1734年からライプツィヒ大学の教授であったJ. Ch. ゴットシェートの一つの詩と、そしてまたそのドイツ語標準語の理論に対する反発があった。啓蒙主義思想の代表的人物であるゴットシェートは1748年に『ドイツ語文法の基礎』を著し、当時のドイツ語標準語形成の論議を代表する立場にあった。彼はその中で言葉の正しさという点でのマイセン・ザクセン方言の優位性を唱え、それが標準語とされるべきことを主張した。同時に彼は南ドイツの上部ドイツ語を批判した。ゴットシェートはその翌年に、ニュルンベルクからレーゲンスブルクへのオーバープファルツの旅をしたが、この旅から戻るとオーバー・プファルツについての詩を発表した。これは『荒れたプファルツの地についてのゴットシェート教授の嘆きの歌・送別賦』と題され、そこにおいて彼はオーバー・プファルツの岩だらけの地形を嘆き、その土地の住民の質の悪さを嘆き、そして最後にその土地の言葉、つまりオーバー・プファルツ方言を、呪うべきほどに粗野で、ごつごつとして、硬く、こわばったものとして嘆いたのである⁶⁾。このゴットシェートのオーバー・プファルツへの悪意に満ちた詩に対して、アイヒンガーは翌年に『ゴットシェート教授の怒りをしずめるためのオーバー・プファルツの努力』という詩を書き、ゴットシェートに答えている。そこで彼はゴットシェートが昼間は眠っていて、夜に旅をしたのではいいのか、そうでなければもっとこの土地の事がわかったに違いないのに、と皮肉を言い、もう一度旅をすればこの地が泥棒や乞食の国ではないことが分かるであろうとしている。そしてオーバー・プファルツの言葉についても、学者の間で名声を得た多くの人物がこの地から出ていることを引き合いに、マイセンやザクセンそしてフランケンの言葉に伍してやって行けることを言うのである⁷⁾。アイヒンガーは、ゴットシェートの詩の中のオーバー・プファルツ地方そのものに対する不当な見下しに反論したのである。ゴットシェートのこの詩は、地形についてもマイセンの平野を理想として賛美し、これに対してオーバー・プファルツを魅力のない土地としているように、現代のステレオタイプの理論をあてはめるならば、ステレオタイプが多次的に対象に付与され、また評価する集団固有（ここでは中部または北部ドイツの）の表象によるものであることが示される典型的な例であるように思われる。ゴットシェートの上記の『ドイツ語文法の基礎』は、「文法一般は、ある一つの民族の言葉を、その最良の方言とその最良の作家の協力によっていかに正しく、優美に話し、また書くべきかを指導するものである。」という文で始まる。「最良の方言」と「最良の作家」が標準ドイツ語の基準にされたのである。彼は「最良の方言」をつぎのように規定する、「一民族の最良の方言とは宮廷において、あるいは一つの国の首都において話されているものである。宮廷が一つ以上存在する時には、国の中心にある宮廷の言葉を最良の方言と見なすべきである。」⁸⁾ また彼は「標準語の核心」は、「いかなる地方で行われているのでもない、一定の折衷的な、厳選され、洗練された仕方で話すこと」

にあると書く。後者の主張は標準語を調整語ととらえるものではあるが、ゴットシェートの調整語の意味は、各地方の方言からのそれを考えたものではなかった。彼の考える「最善の方言」はマイセン方言であり、そのマイセン方言はマイセンの外でも、つまりその周辺でも受け入れられているがゆえに一定の調整語であるというのが彼の立場であった。またマイセン方言を最善とすることによって、もう一つの基準の「最良の作家」も意味を持つのである。彼がそのような作家と考えたのはすべて中部ドイツそして北ドイツの作家であった。彼はいわゆるオーバー・ザクセンあるいはマイセン方言を最良と主張することは争いえないこととする一方、上部ドイツ語一般に対しては徹頭徹尾否定的であった。「最良の方言」の「良い響き」に対して、その他の地方の「逸脱した、ひどい響き」と彼は書く。このようなマイセン方言の絶対化に対しては、それ以前に「調整語」の考え方を代表したJ. G. ショッテルとその後継者たちが反対する立場にあった。アイヒンガーもまた「調整語」を主張する、それも上部ドイツ語を考慮にいたした立場から。彼は1754年に『ドイツ論の試み』を出版し、その中でゴットシェートの標準語理論に対する彼の立場を明らかにした⁹⁾。その前書きの「わたしの文法はマイセン的であることが少ない故に、よりドイツ的である」との言葉が彼の自負をあらわす。彼によれば「自分の生まれた土地の固有の言葉、表現を一般的ドイツ語から区別することは不可能で、方言はそのものとして非難されない、固有のものである。どの地方の言葉も標準語と同一ではない。そのため、学者はドイツ各地の異なった言語地域から標準語を形成するように努めなければならない」¹⁰⁾のである。ゴットシェートのマイセン方言優先の考えに対しては「一地方に限られた言語形式を最良の方言と言うのは、あまりにも単純」と批判する。アイヒンガーは自らの考えを正当化するためにルターのドイツ語の成功について、それが異なった方言の中からの調整語であり、その言葉の持つ特徴がただ一つの地方から取られたものでなく、他の地方の用い方も尊重したものであったがゆえのものであるとする。アイヒンガーは他方、上部ドイツ語学者の同僚の中からの、たとえばシュワーベン方言を標準語とせんとする主張も退けている。この立場の人々によるマイセン方言に対する攻撃は、アイヒンガーに比べさらに激しいものであった。アイヒンガーの立場からは、どれであれ一つの方言のみが正しいという形の議論は否定されるべきものなのである。彼は、ゴットシェートについてそのラテン語文法用語のドイツ語訳を称賛するなど、その権威を認めていたり、またオーバー・ザクセン方言に一定の歴史的発展によるものを許容する等の点で、単純な郷土主義のドイツ語学者ではなかった。彼の関心は、本来ドイツ語についての教授法にあり、みずからの『ドイツ語論の試み』を書いた動機について、1) 目につく言語現象そのものを集める、2) ラテン語でよりもドイツ語で誤る生徒のことを考えた「指導書」をまとめる、3) 一般的に標準ドイツ語に関心を持つ人々のための「実用的文法」を書く、という3点にあったことを証言している¹¹⁾。彼は教授法的関心から、ドイツ各地の異なった言語使用を研究したのであり、彼の方言への関心はそこから出たものであった。彼が「標準語の出来る限り完全な習得のためには、それぞれの方言から

来る誤りが何かを確認しなければならない」と書く時、それは現代のドイツ語教育での対照言語学の考え方を先取りしているのである。標準語の形の正しさの決定、検証について各地の方言を参照する、という点に彼の「調整語」の考えの本質があった。歴史的にみれば、アイヒンガーの提案は受け入れられなかった。始めに引用した彼の言葉は、自らの努力の虚しさとまた成立してしまった一方的偏見の強固さに対する怒りであったのであろう。

アイヒンガーがその「威信」を語ったオーバー・プファルツ方言は現代においても一定の「烙印」を押されている。それも同じバイエルンにおいてすらである。方言を話す人々は、自らの故郷の言葉が「最も正常」で、「正しい、良い響き」を持ち、「隣の地域よりも良い」ものであると主張する。狭いコミュニケーション範囲での同質な人々との「親密な」、「近しい」、「具体的な」会話では、その方言は連帯の意識を保つ上での必要な媒体であることからこれは当然な感情であることは容易に理解されるが、そのような「主観的な」自己による評価は、常により広いコミュニケーション範囲での、より多くの人々との接触、そしてより公的、形式的な場面での他からの評価と直面する時に危ういものとなる。このような意味で重要なのは、自らの用いる「方言」をもってどのくらい遠くまで、「奇異に思われることなしに」、地理的にそして社会的に移動することが出来るかである。オーバー・プファルツ方言を話す人は同じバイエルンの中を移動するにしてもすぐに自らの方言を修正しなければならないことが報告されている¹²⁾。オーバー・プファルツ方言の属する北バイエルン方言は、バイエルン全体の中では少し軽蔑的に、見下した扱いを受ける。これは上にも示したように、北バイエルン方言は北上部ドイツ語に属するが、中部バイエルン方言や南部バイエルン方言で代表されるバイエルン方言は東上部ドイツ語に属するといった方言地理学上の差を考えに入れるべきである。そこで例えばレーゲンスブルクやアンベルク一帯の言葉は、特に南バイエルンの人々からは、その倒置二重母音（例：Bruderはmhd.のbruoderからBrouder。バイエルンの他の地域ではBruider, Bruader）と、母音化しない l

（例：バイエルン中部ではHolzがHöizまたはHuiz）がオーバー・プファルツの人々の言葉の特徴として馬鹿にされるのである。オーバー・プファルツの人々は、例えばそれほど遠くないシュトラウビングに行っても、その土地の中部バイエルン方言の中で目立って異なる自らの方言の特徴を放棄する事を強いられることになる。別の方言変種への適応である。この適応はただちに標準語をめざすわけではない。はじめは、よその土地の言葉の中で目立たないように、たとえば中部バイエルン方言に適応しようと努力がなされるのである。オーバー・プファルツの人々のgöll（geltの意味での）は、たとえば上のシュトラウビングの町へ行けばgeiに変わり、さらに必要が生じればバイエルンでの日常語のgellに変えようとの努力がなされるのである。中部バイエルンの人々にとっても、そのgeiをgellにせねばならない状況は当然存在するのである。バイエルンにおいてこの逆の現象はあり得ない。特に北バイエルンの方言に対して別の言語変種への適応を強いる圧力がかかる。この理由について、現在パッサウ大学のL. M. アイヒンガーは経済

地理学的な性質のものとの説明を加えている¹³⁾。彼によれば、「豊かな」ニーダー・バイエルン(中部バイエルン)の人々は、「貧しい」オーバー・プファルツの人々を同情から軽蔑の念をもって見下しているのである。方言に対するステレオタイプは、この場合も、200年以上昔と同様に単に言葉そのものへの独立したものとして存在するのではなく、一定の社会的、歴史的プロセスを背景にした多次元的なものとして成立しているように見える。

V. ステレオタイプにはフントの調査が対象とした他者による「ヘテロ・ステレオタイプ」、また自己を評価する「オート・ステレオタイプ」、さらに一つの集団が、他の集団が自分たちをどのように見ているかを推測する「推測されたヘテロ・ステレオタイプ」、そして他者が他の集団について彼らは彼ら自身をこのように見るであろうと推測する「推測されたオート・ステレオタイプ」が区別される。実際の社会生活の中ではしばしば重層的に、入り交じった形で存在する。アモンは1978年にシュワーベンの学校で調査し、生徒たちが自分たちとおなじシュワーベン方言を話す人を、知能が低い、あるいは肉体労働者と判断することを確認した¹⁴⁾、また1972年のハッセルベルクによるヘッセンのギムナジウムでの調査でも、生徒たちが方言を話す生徒の成績を一方的に悪く評価する傾向のあることが確かめられている¹⁵⁾。この他に学校での方言の成績に対する影響等の調査は70年代から多数行われ、教授法上の対策をめぐる議論にとりあげられた。ステレオタイプの影響は時にはおかしな笑い話程度の話題として取りあげられたりもするが、そのような害のないものとされているものでも、それが一部の少数の地域の集団に向けられる時には問題が先鋭化する。フントの調査におけるプファルツ方言、さらにオーバー・プファルツ方言に対する各地からの評価はこの種の問題の存在を意識させる。またラインとマイヤーによるヴァルペルツキルヘンでの農夫達のように標準語を話す人に対して不信感を持ち、公的な討論の場には出席しない人々の行動もこのような複雑なステレオタイプの存在を介在させた解釈が可能である。さらに、例えば方言がプロテストの言葉になりうることもH. エーマンによって指摘されている¹⁶⁾。彼の若者の言語使用の調査によれば、一定の方言地域で方言を担っているのは子供たちと職業生活から退いた老人である。具体的な生活の言葉としての方言が彼らの接触語である。これに対して標準語は抽象的で、非人間的な言葉と受けとられる。彼らにとっては標準語は、学校そして職業生活から強いられる言葉である。彼らが社会からの評価に対して集団としての抗議の姿勢を示す際に方言が「対抗する言葉」としての機能を持つ。学校におけるドイツ語教育の議論においては、社会言語学導入の初期の極端な言語障壁論が後退し、80年代には標準語と方言の二言語併用と、対照言語学の方法による標準語教育が取り入れられて定着しているように見える¹⁷⁾。対照言語学は各地方の方言の特質を考慮しての標準語教育を目指すものであり、社会言語学の研究の成果を反映させたものである。各地方で異なる方言の機能、位置づけについて、とくにその話し手に対する評価や心理的態度を見る点で確かに上に示したような主観的なデータを集める研

究は一定の成果をあげている。他方においてまたそのようにして得られたデータをどの様に扱うべきか、またそのデータの信頼性、さらにデータの一人歩きのような問題が付随する。K. ヤーコブは時々行われるドイツ語各方言に対する「人気度」の調査を、信頼の置けない、あやふやなものとする¹⁸⁾。調査を受ける人々はその際に、行きつけの飲み屋の常連客との会話のような水準で、各地方の人びとについて誤って考えられた性格・特徴を付与するか、あるいは彼らは言語的に評価をするのでなく、それによってその方言が媒介されるメディア、テキスト、人物について内容的に評価してしまう傾向があるからである。調査を受ける人達の言語学的知識も問題にされる。ドイツ語各方言についての「人気度」調査として有名なものに1958年にフランクフルトの広告心理学・市場調査研究所が西ドイツ市民の間で行ったものがある。その調査では一番好まれたのはウィーン方言で19%、次にハンブルク方言で18%、さらにケルン（16%）、ミュンヘン（15%）、ベルリン（13%）、シュトゥットガルト（9%）、フランクフルト（8%）、最後にライプツィヒ（2%）であった。これは市場調査目的のものであることを考えねばならないが、しかしながら当時の時代背景について、およびこの種の調査の性格をよく示す。つまりライプツィヒ方言の位置である。IV. に示したようにライプツィヒはドイツ語標準語形成において模範となった言葉であった。その言葉に対する「人気度」は、この調査の時点で極端に低い。これはあきらかに東西ドイツへの分割という政治状況によるものである。情緒的な疎外感の影響が言葉への好みに影響を与えたのであろう。この時人々はライプツィヒ方言を「耳につく」としたのである。ヤーコブの批判にもかかわらず、この調査はライプツィヒ（ザクセン）方言に対する評価の変化が起きたことを明らかにしている（H. バウジンガー）¹⁹⁾。方言に対する評価のむずかしさは、それが純粹に言語学的にとらえられないことからくるのである。上に見たように方言の「威信」はその外的な状況の影響を受ける。フントは自らの調査において明らかになった方言への評価の順位について、なぜこのような順位になるのかについて答えることは「思弁」になるという立場を取った。彼の考えでは、評価の原因となる方言特徴は言語学的クリテリウムとしては「取るに足りない」程度のものであるので、そこからは言語学的な結論は出せないのである。そのために彼は原因を社会的、文化的なものに求めることをより合理的と結論づける²⁰⁾。ヤーコブは方言へのステレオタイプの「威信」と「負の烙印」を、文化的、地域的に根拠づけられた原的ステレオタイプの「代理機能」とする。つまり、言語的ステレオタイプは、非言語的ステレオタイプの基礎の上にもみ成立し得ると考えるのである。「言葉の評価は社会的内包の結果である」²¹⁾と彼は言う。言葉に対する主観的なデータ、心理的態度の調査は、学問的には慎重な処理が必要である。調査の対象が複雑な社会的、歴史的プロセスを背景にしているからである。現代のドイツ語は前世紀と異なり、共通に使われるドイツ語は、ドイツ語圏に属する全ての人々が直接に関与している多層的形成物であり、標準ドイツ語の手本はもはや文学にあるのではなく、マスメディアにあると半ば自嘲的に言われる時には²²⁾、マスメディアの作り上げるステレオタイプも考慮しなけれ

ばならない。フントの調査には、それぞれの方言に対しての評価のコメントが記録されている。それらは、人々の間に方言に対するステレオタイプが無数に、潜在的に蓄えられていることを示している。歴史的にも見たとおり、この種のステレオタイプは無くならない。対象の解明、処理のためには社会言語学はさらに社会心理学や、メディア史の分野との協力を必要とするように思える。

注

- 1) Geleitwort in Hundt, Markus: Einstellungen gegenüber dialektal gefärbter Standardsprache. Stuttgart. 1992.
- 2) Macha, Jürgen: Überlegungen zur regionalen Gebundenheit von Dialektbewertungen, in: Stil: Komponenten Wirkungen Bd.2, Tübingen 1982. S.59ff.
- 3) Kurt Rein u. Martha Scheffelmann-Mayer: Funktion und Motivation des Gebrauchs von Dialekt und Hochsprache im Bairischen. In: ZDL, [87] 42, 1975. S.257ff.
- 4) Hundt, Markus: Einstellungen gegenüber dialektal gefärbter Standardsprache. Stuttgart. 1992.
- 5) Eichinger, Ludwig M.: Der Kampf um das Hochdeutsche. Zum zweihundertsten Todestag des Oberpfälzer Sprachforschers C.F.Aichinger (1717-1782) . In: Sprachwissenschaft. Bd, 8, 1983. S. 189.
- 6) Ebenda, S.191ff.
- 7) Ebenda, S.193ff.
- 8) Ebenda, S.195.
- 9) Ebenda, S.197.
- 10) Ebenda, S.197.
- 11) Ebenda, S.199ff.
- 12) Zehetner, Ludwig: Das bairische Dialektbuch. München. 1985. S.161ff.
- 13) Ebenda, S.162.
- 14) Ammon, Ulrich: Soziale Bewertung des Dialektsprechers. In: Dialektologie. HSK.1983. 1500ff.
- 15) Hasselberg, Joachim: Die Abhängigkeit des Schulerfolges vom Einfluß des Dialekts. In: Muttersprache. 82. 1972. S.201ff.
- 16) Ehmman, Hermann: Jugendsprache und Dialekt. Opladen. 1992. S.18ff
- 17) 拙稿 「Diglossie の現実とドイツ語教育」, ドイツ語教育部会会報38号。1990. 29ページ以下。
- 18) Jakob, Karlheinz: Prestige und Stigma deutscher Dialektlandschaften. In: ZDL. 1992. S.179.
- 19) Bausinger, Hermann: Deutsch für Deutsche. Frankfurt am Main. 1986. S.20ff.
- 20) Hundt, Markus: Einstellungen gegenüber dialektal gefärbter Standardsprache. Stuttgart. 1992. S.70.
- 21) Jakob, Karlheinz: Prestige und Stigma deutscher Dialektlandschaften. In: ZDL. 1992. S.180.
- 22) Weinrich, Harald: Wege der Sprachkultur. Stuttgart. 1985. S.19.